

# 小樽商大での35年をかえりみて

中 村 隆 志

1981年4月1日、私は6年間勤めたコンピューターメーカーを退職し、小樽商科大学商学部管理科学科の助手として赴任した。与えられた研究室は、しばらく使われていなかったのかホコリだらけで、掃除するのに苦労したことを覚えている。

助手としての私の仕事は、「計算機論Ⅰ」という授業での学生のプログラム課題の作成サポートであった。当時、情報処理センターの前身である計算センターは平屋建ての狭い建物で、初級学生はオープンバッチ処理方式（紙カードにパンチしたプログラムを自分でカードリーダーに投入し、結果の用紙をラインプリンターで受け取る）により、汎用コンピューターを利用していた。課題は毎週出題されるのだが、カードパンチ機は4台ほどしかなかったため、課題提出締切日などは、パンチ機の前に学生の長い行列ができていた。週に1～2度、計算センターに出かけ、この課題をやっている学生の質問等に答えるのが私の役目だった。

前職での仕事は基本ソフトウェアの研究、開発であったが、大学でも継続して研究可能なものではなかったため、研究テーマをどうすべきか考えた。当初はソフトウェア工学分野を検討したが、管理科学科ならば、やはりオペレーションズ・リサーチ関連の方が適当ではないかと思い、また、学生時代に勉強した待ち行列理論にも興味があったため、確率的に状態の変動するシステムの分析、評価に関する研究を行うための勉強を始めた。そして、新交通システム、生産システムの評価や、システムの分析手法に関する研究等を行った。

1984年、本学管理科学科で応用数学担当教官の公募が行われた。これに応募

したところ、運良く専任講師として採用が決まり、翌年から、ようやく授業を担当できる身分となった。

1988年の春、計算センターを情報処理センターに改組拡充することが認められ、このためのシステム仕様書策定委員会の委員に私も任じられた。急に改組が認められて仕様書策定の期限も迫っていたため、この委員会は過酷なものとなった。毎日、午前10時から午後10時までが会議の時間で、主要メンバーが授業の時のみ会議は休憩するといった有様だった。5月の連休も返上して3ヶ月余りの間この会議は続き、病気で倒れる委員も出る始末であった。しかし、どうにかシステム仕様書は完成して入札が行われ、翌年2月に情報処理センター初のシステムが無事稼働した。この後、私はセンター員、副センター長、センター長として10年余りの間、情報処理センターの運営に深く関わることとなった。

学部での担当授業はいろいろと変わったが、退職まで長い間担当していたのは「情報処理」である。これはプログラミング入門の授業で、履修者が本当に自分で学ぶ気がなければ習得できない科目である。このために、どうしたらプログラムに興味を持ってもらえるか各種工夫を試みた。

思い返せば、小樽商大での35年間にはいろいろなことがあったが、今では皆懐かしい思い出である。

おわりに、研究、教育上のさしたる貢献がないにも関わらず、名誉教授の称号をいただき、さらには研究報告の記念号を出していただくことについて、厚く御礼を申し上げます。